

奈良公園におけるスポーツ施設の変遷と文化表象 ：「近代化」から「奈良ブランド」構築へ

渡 邊 昌 史
(武庫川女子大学健康・スポーツ科学部)

The Changes in Sports Facilities and the Cultural Representation of Nara Park: From “Modernization” to Building the “Nara Brand”

Masashi Watanabe

Department of Health and Sports Science, Mukogawa Women's University

Abstract

Nara Park is located in Nara Prefecture in Japan and represents an image of the ancient capital of Nara.

This study discusses changes that were made to the sports facilities constructed in the park and the change of the image of Nara Park.

Nara Park was created in 1880 and was affected by a conflict between changes in the times, which require the development of up-to-date facilities, and the park's ability to serve as a sightseeing attraction, which requires the preservation of its scenery. In 1910, an athletics stadium, tennis courts, and a baseball field were built. In 1928, a swimming pool was constructed and a comprehensive sports facility was added, which gave Nara Park a complete sporting site. Nara Park is set on land that was formerly a temple but, once the sports facility was created, it became a “modern” public park.

In 1988, the “Nara Silkroad Exposition” was held there. For this event, permission was given to eliminate the “modern” elements, which referred to the sports park, and to preserve it as an authentic “ancient city.” Consequently, all of the sports facilities were removed.

Through the expulsion of “modern” elements, the differences between “modern” and “the Ancient Capital of Nara” have created the current format of the Nara brand.

1. はじめに

「古都奈良の文化財」として世界遺産(文化遺産)に登録されている東大寺, 春日大社, 春日山原始林, 興福寺, 元興寺, 薬師寺, 唐招提寺, 平城宮跡. 地理的にそれらの中心に位置する奈良公園は「木々に映える堂塔伽藍, 若草に萌える芝生, 鹿の群れ遊ぶ風情, 『大仏と緑と鹿』で代表される奈良公園は古都奈良の顔でもあります¹⁾」と謳われる. まさに, 奈良公園は古都奈良を象徴する空間といえよう.

観光地としてのまなざしが「奈良」に向けられるとき, 真っ先に思い浮べるのは, やはり先のような景観であり, 奈良公園は「古都奈良」としてのブランドイメージのシンボリック的存在となっている. シンボルであることの核心は, 「中国(唐)との交流を通して日本文化の原型が形成²⁾」された地であり, その文化遺産と「雄大で豊かな緑の自然美が調和して, 他に類例のない歴史公園³⁾」となっているという認識である. 本論では, このような古都奈良におけるブランドイメージを「奈良ブランド」と定義する.

奈良公園の歴史については, 奈良公園開設 100 周年を機に奈良県が企画し, 奈良公園史編集委員会に

よって編まれた『奈良公園史』(以下、『公園史』という)が詳しい。そこでは、古代から近世までの史料及び明治以降の行政文書から、古代から現代に至る時間のなかで形づくられてきた奈良公園の景観と文化財について、行政側からの視点で取りまとめられている。

本研究はこうした先著に導かれ、奈良公園を核とする奈良ブランド構築のプロセスについて明らかにすべく、なかでも奈良公園におけるスポーツ施設の変遷に着目する。今日、奈良公園内にスポーツ施設は皆無であり、また奈良ブランドからスポーツを想起することもないであろう⁴⁾。しかしながら、かつて奈良公園には西日本屈指ともいえる一大スポーツ施設が存在していた。だが、その事実は奈良ブランドを前にしたとき、あたかも封印された物語のようである。

奈良の歴史が語られるとき、往々にしてそれは「奈良時代」のことである。しかし、言うまでもなく都が置かれていた歲月より、後世の歴史の方がはるかに長い。平城京から都が遷されて以降の奈良は大社寺が残ったことにより、社寺の町として歩んできた。近世に限ってみれば、奈良は東大寺、興福寺などを中心とする信仰あるいは物見遊山の地であった。その要の地が、明治の世に近代公園に姿を変え、次いでスポーツをおこなう場がつくられ、やがてそれが「秘匿」されることで古都奈良の象徴的存在となった。この一連の変化のなかに、奈良ブランドが創造されてきたことの本質をみることができるのではないか。

本論はこのような問題意識のもと、奈良公園におけるスポーツ施設の変遷から、近代における「古都奈良」の顕現化としての奈良ブランド創出について論じるものである。

2. 奈良公園におけるスポーツ施設の変遷

2-1. 奈良公園の開設

奈良公園の歴史的展開について、あらかじめ素描しておきたい。

奈良公園は1880(明治13)年2月14日、堺県(1876年に奈良県を吸収合併)上申の公園地制定が太政官の内務卿伊藤博文から認可されたことに始まり、同日をもって開設日と刻んでいる⁵⁾。

これに先立つ1873(明治6)年、太政官は各府県に対し「古来ノ勝区、名人ノ旧跡等、是迄群衆遊観ノ場所」を「万人偕楽ノ地トシ、公園」とするために選定し、報告するように布達していた。この太政官布告のねらいは、土地政策(地租改正に絡む寺社処分地問題)を前面に置きつつ、居留外国人の要求に学んだ欧化施設として、さらには従来の行楽地の保全を含む社会政策の側面を持っていた⁶⁾。

このとき、奈良では全国随一の巨大領主寺院を誇った興福寺が瓦解して、境内は官有地となっており⁷⁾、奈良公園は当初、旧興福寺境内などの官有地を中心とした区域で開設された⁸⁾。太政官からの認可書には風致の破壊を厳しく制禁した付記があり、保存の絶対優先が指令されていた。この意図について、『公園史』では「奈良公園の心臓部にあたる旧興福寺寺地を官憲が官衙街⁹⁾としてむしろ開発してきたことへの反省」と解している¹⁰⁾。

1887(明治20)年に再設置された奈良県によって、1889(明治22)年3月22日、県立奈良公園が発足した。旧来の公園地は興福寺近辺に限られた小地域であったが、寺社の境内地を網羅(春日大社の境内地を除く)、さらに春日野、浅茅ヶ原の名勝地や春日山、若草山、手向山から春日奥山の花山、芳山に及ぶ山野を公園地に指定することによって大幅に拡大、現在と同等の広がりをもつようになった¹¹⁾。実質的な開園と言えるが、公園自体には呼びものというべきものはなく、太政官布告の趣旨どおりに、江戸時代からの寺社境内地、名勝に「公園」の名を新たにかぶせただけというものに過ぎなかった。

1893(明治26)年11月の臨時県会にて、公園改良予算が上程され、「庶衆楽マシムルハ独り天然ノ風致ノミヲ以テ足レリト難ク、(中略)園内荒蕪地其他不潔ノ箇所ハ一層人巧ヲ加ヘ、相須テ完全ナラシメル」ため、公園に一大改良を施すこととなった。県が推し進める公園改良案は公園内山林の伐木の売却益を充てること、さらには外国人観光客に対応するためのものであるとしたことから、自然保護の観点及び「欧化」であるとの議論を巻き起こした。この論争のなかから「奈良公園は自然美を輝かす史蹟名勝公園として護持されるべしとの『奈良公園是』(以下、「園是」という)」が確立した¹²⁾。

1895年(明治28)年には、レンガ造洋館建築の奈良帝国博物館、木造洋風建築の奈良県庁、古建築の興福寺が鼎立するかたちで奈良公園の玄関口を飾った。県庁舎の建築材には公園の林木を用い、その代金が公園の植栽に充てられた¹³⁾。ここに公園の林木を伐採・売却し、その利益を公園運営費に充当するシステムが確立し、公園改良の経済的裏付けが出来上がった。

時を同じくして、飛躍的な発展を遂げた鉄道網によって、奈良へ観光客が押し寄せてくるようになっていた¹⁴⁾。

2-2. 近代化のためのスポーツ施設

1900(明治33)年には、向こう十カ年の公園改良計画によって、道路改修、建物、樹木植栽などと並び運動場新設が進められることとなり¹⁵⁾、旧寺院境内地からスタートした奈良公園の整備は、「近代化」として展開していく。

そもそも、奈良公園になぜ運動場が設けられることになったのか、近代公園における運動場の設置の意味について考えてみたい。

太政官布告以来、全国で旧来の行楽地が新たな政策意図のもとに公園に指定されるなかで、都市計画的な思想から初めて計画された公園が日比谷公園であった。

日比谷公園の設計コンペに提出された設計11案のそのほとんどに「運動場」が描かれている。これは日本における公園受容の特徴を示しており、そこには当時の日本人の公園観が投影されていると見てよい。

都市公園にみる運動場は、19世紀中葉以降の欧米における公園の大きな特徴であり、幕末・明治の海外渡航者たちが見聞した公園のイメージそのものであった¹⁶⁾。

1903(明治36)年に日本最初の近代式洋風庭園として誕生した日比谷公園には「運動場」が設けられた¹⁷⁾(図1)。トレースした本多静六¹⁸⁾は「洋風庭園内の運動場の形状は西普漏斯克コーニック市公園の運動場」と説明している¹⁹⁾。本多の言によれば、日比谷公園に運動場を設置した理由は、運動あるいはスポーツを積極的に評価し、その必要性を認めたとするよりは、むしろ留学先のドイツにおける「公園には運動場を附設する」という先例に倣ったものになる。実際、本多が参考にしたとされる、ルトラム著『造園設計集』掲載の図を見れば、そのまま引き写したであろうことが一目瞭然である²⁰⁾。

結果として、日比谷公園のすべての造成の設計に携わった本多は、日本における洋風公園設計の第一人者、日本の公園設計の第一人者という名声を獲得することになった。

1909(明治42)年4月、県は奈良公園近代化改良構

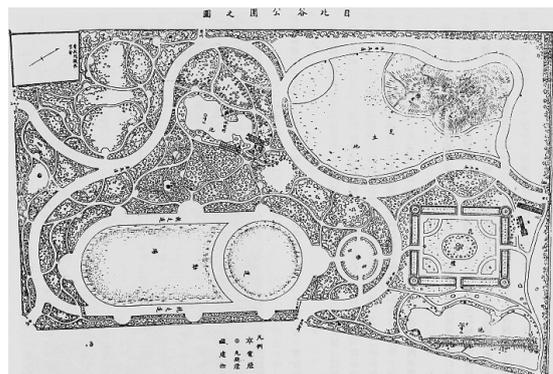


図1 日比谷公園の開園間もない頃の平面図。左下が「運動場」(白幡, p.209)



図2 明治末から大正初期の春日野運動場。運動場の形状は図1に相似している。中央奥が「明治修理」のために覆いが被された東大寺大仏殿。左端には南大門がみえる(絵はがき)



図3 明治末から大正初期の春日野運動場。右手奥が同時期に落成した県公会堂(絵はがき)

(渡邊)

想を推し進めるべく、本多静六を招き講演会を催した。本多に奈良公園の近代化改良構想を求めると共に、県の公園改良計画に理論的裏付けを行い、説得力を増すためのものであった²¹⁾。講演要旨には大運動場の他にも動物園、植物園などが具体的な数値をあげて記されている。大運動場のみ抜粋する。

「近来の運動場の形式は四角形の隅を弧形とする原則であるから、この形式を採用し、将来大宴会等催す場合に充てる目的を兼ね南北直径170間、総面積1万5千坪…、13万5千人を収容可能な我が国第一の大運動場とする。」

「場内を大中小及び丸型の4運動場に区画を分け、大運動場は縦110間、横70間にして競走路は幅7間、1周すれば340間半であり自転車競争等に用いる。」

「運動場の規模は、中運動場は周回124間、小運動場は周回91間、丸運動場は主として女子又は児童の運動用のために設け周回81間、競争路面の幅は共に5間とする。空き地を利用して、長さ18間の庭球場を3か所設ける。」²²⁾

講演会によって、お墨付きを得た県は公園内の山林伐採による資金で春日野に運動場、植物園の開設、春日奥山の観光開発を実施に移す。

県が運動場開設をもくろんだのは、県公会堂(図3)の建設とからんでのことでもあったという。それまで、興福寺北側の芝生地(旧県庁舎を撤去)が運動会などに使用されていたが、運動場と呼べるようなものではなかった。そこで、東大寺周辺整備と併せて、公会堂に隣接する運動場建設が懸案となり、周辺民有地(1480坪)が買収され、公園地が拡充した²³⁾。これに従えば、運動場開設のねらいは新設する公会堂と東大寺南大門に挟まれた空間を一体的に整備するためであったことになる(図4)。

だが、奈良公園は開設当初より旧態保存が至上命題とされたことから本来現状変更は認められないはずであり、園是からしても運動場の設置は相容れないものであった。この矛盾について『公園史』によれば、「国民体力向上のねらいで近代スポーツの振興が叫ばれたため」であり、公園内に設置したのは経費の問題が大きく、公園整備という一石二鳥の効果があがるという目算であった²⁴⁾。

運動場予定地はももとの公園地ではなく、公園地への編入以前は民有地であったことから、旧態保存の至上命題、さらに自然美を輝かすという園是のいずれも対象外とする玉虫色の解釈であろうか。

運動場は明治43(1910)年1月に着工、5月30日に完成、

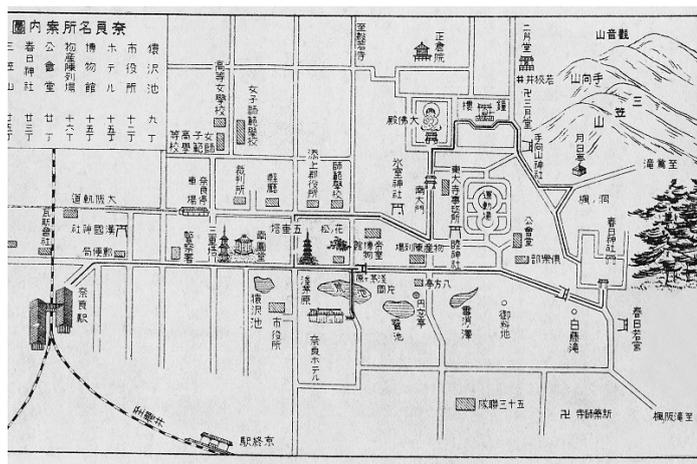


図4 鉄道省『鉄道旅行案内』p.127, 1921年

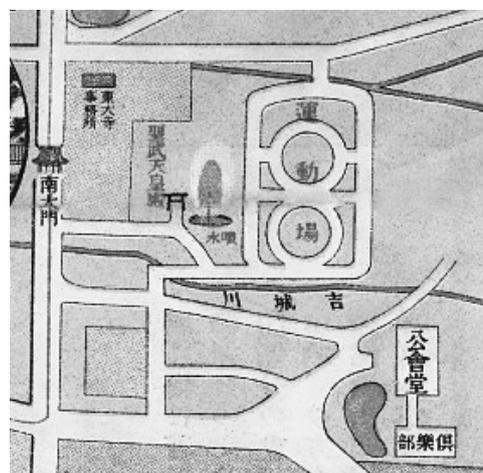


図5 運動場のトラック内に円形コースがみえる(「奈良名勝案内図」1922年)

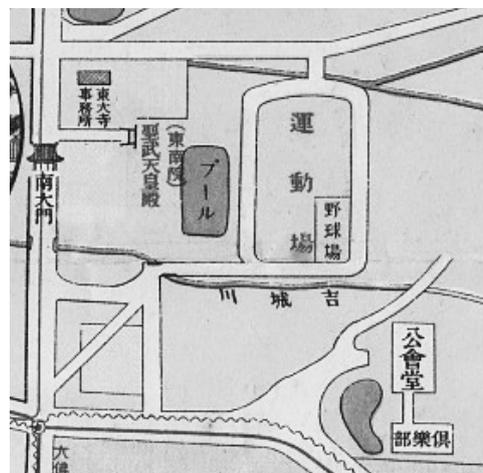


図6 運動場のトラックが変わり、野球場、プールが描かれている(「奈良名勝案内図」1936年)

11月21日には開場式及び祝賀運動会が挙行された。工事報告によれば「域内16445坪の内、東西65間、南北125間、平面8125坪」を整地、「大中小のコースを設け、大は円周300間、中は133間、小は60間」、他にテニスコート、ベースボールグラウンド、5段の観覧席、浴場付きの選手控室を設け、外周には松桜楓を植樹した²⁵⁾(図5)。

東大寺南大門の東側、奈良公園内に1周600m、直線200m規模のコース設定が可能な阪神地方屈指の大競技場が誕生したのである。これは奈良公園がパブリックな空間としての「広場」の性格に加え、西洋からもたらされたスポーツが帯びていた「近代性」をも合わせて纏ったことを意味する。

1925(大正14)年4月には、運動場東部を拡張(1225坪)、庭球場として硬式1面、軟式2面の3コートを設けた²⁶⁾。

こうした施設拡充の背景には、大正期における公衆衛生概念の広がりとともに、国民の健康を維持するための施設として、スポーツ施設が国家的な枠組みの中で認識されるようになり、公園行政にも「体力は国力」と見る国家的理念が反映していた²⁷⁾。「多年の懸案」(県)とされていた水泳場は1928(昭和3)年に「御大典記念事業」として進捗することとなり、春日野運動場に隣接する三社池が選ばれ、翌29年5月19日に竣工した。敷地総面積3300㎡のなかに競泳、高飛込、水球のできる50mプール(水深1.15~4m)と子ども用プール(150㎡)、木造家屋脱衣所が設置された。さらに、水泳場の南側にはブランコ、すべり台などを備えた児童遊戯場が置かれ、新公園と呼ばれた²⁸⁾(図6、図7)。

ここにおいて奈良公園内にグラウンド、テニスコート、プール、そして児童遊戯場も備えた総合スポーツ施設「春日野運動場」の完成をみた(図8)。春日山原始林の遊覧道路、公会堂などと併せた近代的施設の竣工により奈良公園の「近代化」は完遂したのである。

日本唯一の全面芝グラウンドの春日野運動場は奈良公園における「近代化」の象徴であった。だが、昭和期に入ると国家における体位向上・体力増強の奨励など、時勢によってその表象が変化していく。

1939(昭和14)年には、紀元2600年奉祝事業として春日野運動場付近に山桜100本、水泳場の一角にも50本植えて桜園を出現させた。江戸中期の国学者本居宣長の和歌「敷島の大和心を人とはば朝日に



図7 水泳場、テニスコート、児童遊戯場が整備された(「奈良公園平面図」戦前)

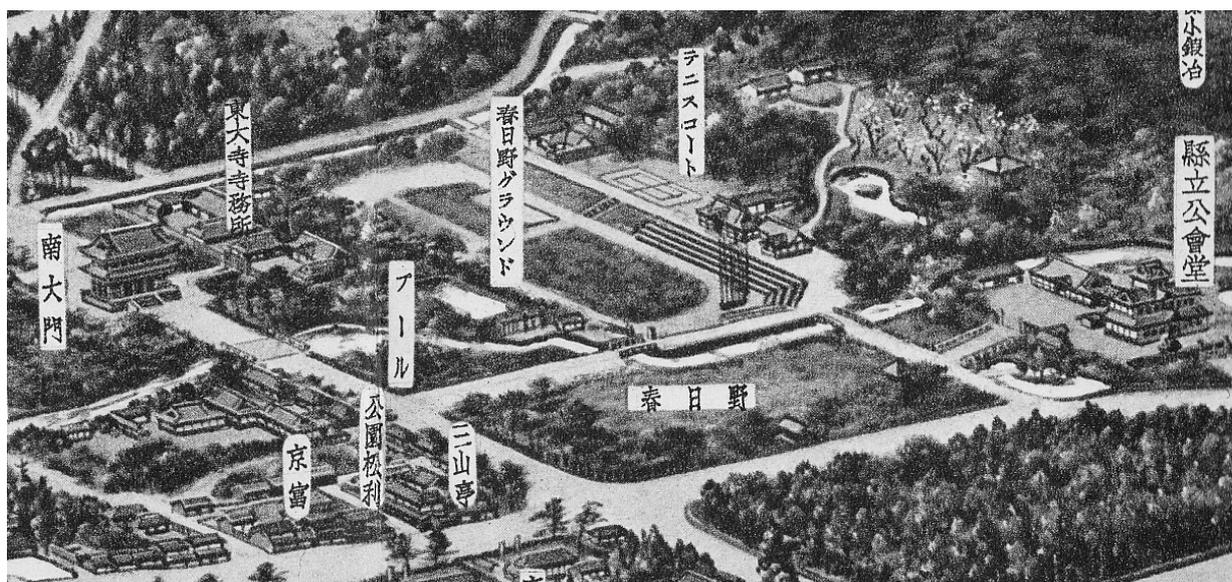


図8 『奈良観光市街地図』1935年

(渡邊)

に「ほふ山桜花」が明治期に再解釈されたことによって、桜が「日本古来の精神＝大和魂」を象徴するものとなり、さらに政治的ナショナリズムと結びつけられていた。桜の植樹はその可視化であり、奈良公園に新たな表象が付加された。

図9は、春日野運動場で実施された旧制中学の生徒による軍事教練であり、年1回実施された査閲(軍から派遣される査閲官が教練の成果を視察・評価する)とみられる。1945(昭和20)年6月には食糧増産のため春日野運動場が開墾され、蔬菜畑に転じた一時期もあった²⁹⁾。



図9 春日野運動場における旧制中学の軍事教練。昭和10年代後半(『奈良市の昭和』p.33, 2015年)

戦後、GHQによって1946年(昭和21)年5月に春日野水泳場、7月に春日野運動場がそれぞれ接収され、アメリカ軍によって独立記念日のパレードも実施されたという³⁰⁾。水泳場、運動場の接収は1952(昭和27)年まで続いたが、社会の混乱が落ち着きを見せ始めると、観光地としての奈良公園にはぎわいを取り戻して行った。1949(昭和24)年には県が観光開発のために若草山にローンスキー場を設置している。

春日野運動場は陸上競技場、野球場、ラグビー場、観覧席、選手控室などが整備され、プロ野球の公式戦も開催された。興福寺境内各所に「野球禁止」の制札が立てられたことから当時の熱気とともに、市民にとってきわめて身近なスポーツあるいは憩いの場であったことがうかがい知れよう(図10)。

2-3. 「奈良ブランド」醸成のためのスポーツ施設撤去

1963(昭和38)年3月、県は県勢振興のための長期基本計画として「新総合開発計画」を策定、「奈良公園整備計画案」が成った。建設省に上申、「奈良国際文化観光都市建設公園事業」として認可を受け、グラウンド、テニスコート、プールを含めた春日野付近の工作物の全撤去、芝生広場化の方針が決定した。

1965(昭和40)年、県庁舎の竣工に続き、文化会館、美術館などの文化施設の整備が続き、1969(昭和44)年には近鉄奈良駅の地下化、登大路の拡張ともあいまって奈良公園へのアクセスは一変した。

この間、春日野運動場には手が着けられていなかったが、1988(昭和63)年開催の「なら・シルクロード博覧会」を前にして、春日野会場整備のために撤去された。博覧会終了後には「奈良公園らしさである雰囲気をもつ人類共通の財産にふさわしいオープンスペース³¹⁾」とするために、春日野園地(グラウンド跡)、三社池、浮雲園地(水泳場、児童遊戯場跡)、奈良公園館(テニスコート跡)として再整備された。

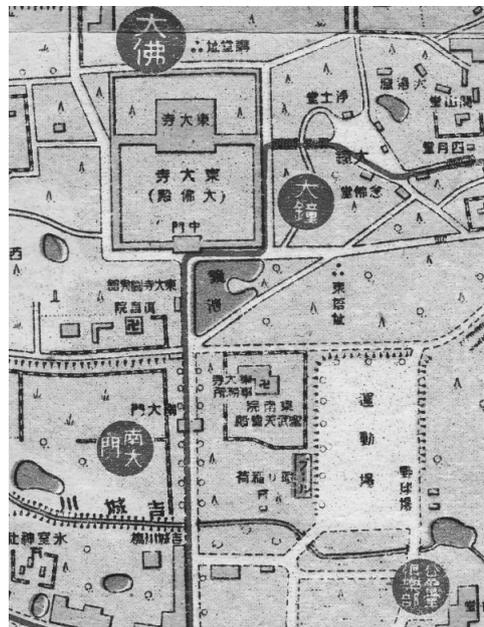


図10 「最新奈良観光市街図」1946年

かつて春日野運動場があった春日野園地は位置的にも奈良公園の中心を占め、若草山をはじめとした山々、東大寺大仏殿、南大門を眼前に望む多目的の広場として活用され、1999年から始まり奈良の夏の風物詩となった「なら燈花会」のメイン会場となるなど、奈良公園らしさを表象する空間となっている。

3. 公園空間の文化表象の変化と「奈良ブランド」構築

3-1. 古都奈良の「発見」と創造

今日、奈良は「唐の文化の影響を受けた国際色豊かな天平文化³²⁾」のイメージをもって語られ、奈良ブランドもそれによって担保されている。それでは、日本史教科書にも記されているように、奈良が天平文化をもって表象されるのはいつからなのか。

近世で見れば、奈良は西国巡礼などの「信仰の地」であった。庶民信仰の対象は興福寺では西国三十三所の札所の南円堂であり、阿修羅像、十大弟子像といった天平彫刻に興福寺のイメージを重ねることなかった³³⁾。前近代において奈良に天平文化のイメージが求められることはなく、奈良を「古都」として見るまなざしも存在しなかったのである。

1868(慶応4)年の神仏分離令によって奈良の寺社は大打撃を受けた。朱印領2万石の石高をもつ興福寺は廃寺となり、僧侶は春日神社(現在の春日大社)の「新宮司」へと姿を変えた。東大寺においても仏像が廃棄され、多数の逸品が海外に流失した。1900(明治33)年頃発行と推定される絵はがきに見える大仏殿の屋根は傾き、波打つ庇は支柱で支えられている。のちに奈良ブランドの根幹となる寺社はまったく顧みられることもなく、消滅の危機に瀕していた。

転機は奈良が「日本文化」創生の起点として「発見」されたことによって訪れる。

幕末の政治状況のなかで、朝廷において古代奈良が皇室の歴史・起源のなかに組み込まれた。江戸時代の朝廷は現世の個人が来世の個人の善徳を弔う仏教的来世観念によって、系譜意識は京都で完結しており、古代としての奈良とはまったく縁をもたなかった。近代において「万世一系」の国体イデオロギーが創造されると、それまで京都で完結していた朝廷の祖先の場として、「古都奈良」が特別な意味をもって発見され再浮上することとなった³⁴⁾。

この流れのなかで、奈良、京都が日本の「歴史」「伝統」「文化」を具現するものとして、近現代を通じて創りだされるようになる。奈良は「日本文化」創生の起点として、ギリシア文明に比するものとされたのである。

1880年代には興福寺が復興されるが、藤原氏の末裔である華族(近衛、九条、西園寺など)の権威づけのため、貴族院設立を射程においたものであったという³⁵⁾。さらに東大寺、法隆寺も経済的疲弊を皇室への献納宝物(御物)によって、乗り越え復興していく³⁶⁾。ここにおいて、歴史的古代を表象する「古都奈良」が初めて登場することとなったといえよう。奈良公園の開設はこの歴史的文脈のなかに位置づけられるのである。

3-2. 近代化、そして文化財化

旧興福寺の境内地から始まった奈良公園。相次いで開通した鉄道によって押し寄せて来る観光客の目当ては巡礼地の南円堂であった。ところが、先述のように政治的な意図のもとに興福寺が復興されると、それまでの公園の主要域が興福寺に戻された。結果的に奈良公園はその立地の中心を失い、その存続が危惧されることとなった。そこで、新たな展開として求めたのが公園域を拡張するとともに、公園の近代化、観光化であった。自然保護を園是としながらも、公園内の山林伐採・売却による収益といった、いわば禁断の果実をかじりながら公園改良が展開された。

公園改良によって、公園域の性格も変化していった。奈良公園は旧寺社地から始まったことにより、もともと「信仰の地」であり、いわば閉じられた性格のものであった。そこに運動場が設置されることによって、公共性を有する開かれた空間へと変化した。換言するならば、武士の専有物であった近世城郭が明治以降に市民に開放され「近代」の公園となったように、奈良公園は近世においてもっぱら信仰者の拠りどころであった地に、スポーツ施設がつくられることによって「近代」の公園となり市民の共有財産となったのである。このことは、明治初めにフェノロサや岡倉天心らによって、仏像が信仰の対象から鑑賞の対象へとその価値を転換させられた³⁷⁾のと同じように、スポーツ施設によって公園空間は聖地から公共地へとその価値転換をみたことを教える。

「静かなたたずまいの奈良公園³⁸⁾」もまた、きわめて現代的な属性である。1918(大正7)年春、雑踏する公園内で自動車が行くのは危険だとして、県警察部は自動車走行禁止区域を設けている。同年、国鉄や大軌³⁹⁾(現在の近鉄)を利用して奈良を訪れた人たちは183万人を超えた⁴⁰⁾。奈良公園は周辺を寺社仏閣が取り巻き、内には総合スポーツ施設を抱え、多くの観光客、スポーツ愛好者が集うモダンな空間であった。

昭和初期には大衆社会状況を背景にしたツーリズム、さらには紀元2600年奉祝の国家的祝祭のなかで奈良公園は「聖地大和」の宣揚としての重要な観光資源と位置づけられたこととも相俟って、奈良公園としての文化表象が確定してゆく。

ここで忘れてはならないのは近代に創りだされた「古都奈良」の文化表象は「神武創業」、すなわち神話的古代の場である神武天皇陵・橿原神宮⁴¹⁾と共にあったことである。「古都奈良」はその前提条件として、「聖蹟」橿原と奈良が相即不離の関係にあるときに成り立つものであった。だが、敗戦後、国体イデオロギーの否定により橿原神宮がそれまでの地位を失ったとき、その関係も絶たれた。そこで、「古都奈良」の比翼の一方を欠いた奈良が、自らだけで「古都奈良」を背負って立とうとしたとき、その文化表象と相容れなくなったのが奈良公園におけるスポーツ施設が内包する属性「近代性」であった。折からの観光ブームの到来によって「古都奈良」が脚光を浴びれば浴びるほどに、その自己矛盾を深めていくこととなった。

1966年に公布された通称「古都保存法」が「わが国往時の文化の中心」として京都、奈良、鎌倉を「古都」と規定した⁴²⁾ことも、奈良が「古都奈良」として独り立ちすることを後押しした。

「県整備基本計画」では奈良公園におけるスポーツ施設の撤去について「市街地及びその周辺でスポーツ施設が充実」したことを理由にあげているが、そこで何よりも希求されたのは「近代性」を「古都奈良」の中心から周縁に移すことによる「古都」としての真正性の確保であったとみてよい。よって、奈良公園からのスポーツ施設の撤去は、奈良公園それ自体を「文化財」化させていく流れのなかに位置づけられるのである。

4. まとめに代えて

奈良公園は興福寺などの旧寺院境内地から始まった経緯から宗教性を帯びていた土地であり、いわば「閉じられた」空間であった。そこに、春日野運動場がつくられることによって公共性を有する「開かれた」空間となり、外来スポーツが内包していた属性「近代性」によって「近代」の公園へとその性格を変化させたのである。そして、「古都奈良」の核心となるためにスポーツ施設を除去することによって「近代性」を放逐、「近代」との差異化を通じて奈良ブランドを確立させて来たのである。

注

* 図2～7、図9はいずれも著者蔵。一部を抜粋。

- 1) 奈良県土マネジメント部まちづくり推進局奈良公園室、奈良公園情報サイト「奈良公園・Quick Guide」、<http://nara-park.com/about.html>、閲覧日2016年9月7日。
- 2) 文化庁文化遺産リスト、古都奈良の文化財、http://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlink7、閲覧日2016年9月7日。
- 3) 奈良県土マネジメント部まちづくり推進局奈良公園室、閲覧日2016年9月7日。
- 4) 2016年現在、「奈良からJリーグへ」を標榜し活動するサッカーチーム「奈良クラブ」、そしてジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ(Bリーグ)に加盟する「バンビシヤス奈良」などが、奈良を拠点として活動している。いずれも名称、シンボルマークが鹿をモチーフ、すなわち奈良をイメージさせるものとなっているが、これらは地域密着型としての表象であり、「古都奈良」と直接的な親和性をもつものではない。
- 5) 奈良公園史編集委員会『奈良公園史』奈良県：奈良、pp.93(1982)
- 6) 白幡洋三郎『近代都市公園史の研究：欧化の系譜』思文閣出版：京都、p.180-181(1995)

- 7) 幕末から明治維新の神仏分離、さらに1870(明治3)年の太政官布告によって、境内地以外は上知となり、それを廃仏毀釈が追い打ちをかけた。五重塔は250円で売却され、購入者は塔に火を放って燃やし尽くし、残った金具を拾うことを企図していたが、類焼を心配した付近住民の反対にあい、結果的に塔は破壊を免れたという。
- 8) 奈良公園史編集委員会, pp.98-101
- 9) 当初の公園地とされた興福寺の旧寺地には堺県出張所、遥拝所、堺県師範学校分局奈良学校などが置かれていた。
- 10) 奈良公園史編集委員会, p.106
- 11) 同, pp.157-194
- 12) 同, pp.157-164
- 13) 同, p.195
- 14) 1892(明治25)年に大阪湊町から奈良へ鉄道が開通、1896(明治29)年には京都から奈良へと通じ、1898(明治31)年には加茂を経て名古屋まで至る民有鉄道が開設された。
- 15) 奈良公園史編集委員会, p.195
- 16) 白幡, pp.205-219
- 17) 日露戦争講和に不満を持つ民衆が集まり、焼き打ち事件のきっかけとなった大会が開かれたのもこの運動場であり、伊藤博文、大隈重信の葬儀も営まれた。戦後は、接収解除まで占領軍が野球場として使用していた(「東京新聞」2015年6月11日)
- 18) 1866年生～1952年没。日本の造林学、造園学の基礎を築いた林学者。ドイツで国家経済学を学び帰国後、林学博士となり、日比谷公園の設計、明治神宮の森の造営に携わるなど、各地の公園設計に尽力した。明治の建築界をリードした辰野金吾からの依頼を受けて、日比谷公園の設計に関わるのであるが、もともとは林業の専門家で公園の設計は未経験であったため、本多自身がドイツで買い求めてきた造園の図面をそのまま利用して設計した。
- 19) 白幡, pp.186-212
- 20) 同, pp.208-210
- 21) 奈良公園史編集委員会, p.255
- 22) 同, pp.247-255
- 23) 同, p.258
- 24) 同, p.257
- 25) 同, pp.258-259
- 26) 同, p.313
- 27) 丸山宏『近代日本公園史の研究』思文閣出版：京都, p.149(1994)
- 28) 奈良公園史編集委員会, pp.333-334
- 29) 奈良公園史編集委員会, p.12
- 30) 同, p.12。『奈良市の昭和』樹林舎：名古屋, p.33(2015)
- 31) 奈良県・(株)大塚造園設計事務所「奈良公園整備基本設計説明書」, p.7(1989)
- 32) 笹山晴生、佐藤信、五味文彦ほか『詳説日本史B』山川出版社：東京, p.55(2015)
- 33) 高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店：東京, p.77(2006)
- 34) 同, pp.57-89
- 35) 同, p. xi
- 36) 1875年に東大寺の「勅封宝物」は内務省へ移管、すなわち召し上げられた。法隆寺は1878年に宝物322点を献納し1万円の下賜金を受けとった。
- 37) 木下直之『美術という見世物』平凡社：東京(1993)
- 38) 奈良県土マネジメント部まちづくり推進局奈良公園室, <http://nara-park.com/about.html>, 閲覧日2016年9月7日。
- 39) 「だいき」。現在の近畿日本鉄道(近鉄)の直系母体にあたる私鉄会社「大阪電気軌道」の略称。当時このように呼ばれていた。

(渡邊)

40) 奈良公園史編集委員会, p.280

41) 高木, p. xi

42) 丸山宏・伊從勉・高木博志『みやこの近代』思文閣出版：京都, p.2 (2008)

受稿日 2016年9月19日 受理日 2016年12月1日